『トラ×トラ』

堂神瞬一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『トラ×トラ』

【Ｎコード】
Ｎ７４３６Ｄ

【作者名】
堂神瞬一

【あらすじ】
ここ京都には、子守り、畑仕事、修理等どんな仕事も引き受ける『万能屋』と呼ばれる者達がいる。だがその『万能屋』には、もう一つの顔がある…。

第一劇『二人の虎』

虎吉「あかん…目も当てられへん…。」

虎之介「どうしたの？」

虎吉「どうしたもこうしたもあるかい！……真っ赤っ赤や…。」

虎之介「また赤字？」

虎吉「あかん！こんままやったら廃業や！」

虎之介「ん～最近お客さん来ないもんね。」

虎吉「どないしょ…虎、仕事探してこんかい！」

虎之介「今から？無理に決まってるだろ？」

虎吉「何や？お前はこの『万能屋』が潰れてもええん言うんか？」

虎之介「そんなこと言ってないだろ？」

虎吉「う～ん…こうなったらまたババァにでも…。」

虎之介「駄目だってば！おばさんにはいつも世話になってんのに！」

虎吉「アホかっ！背に腹は変えられへん！なぁに、こっそり忍び込んで預金通帳を…ひっひっひ…。」

虎之介「…あ！ヤバイよ虎吉！学校に遅刻する！」

虎吉「アホ言うな！学校なぞ行ってられへんわ！何が悲しゅうて、こないな時にお勉強なんかせなあかんねん！」

虎之介「もうっ！せっかく学校に通えんだよ！休んだりしたらおばさんに申し訳ないだろ！」

虎吉「知るかっ！あのババァが勝手にしよったことやろが！」

虎之介「仕事なら学校で探せばいいだろ！もしかしたら三日前に貼ったポスター見て、誰か依頼してくるかもしれないし！」

虎吉「あ！せやな！ほな急ぐで虎ぁっ！依頼人さんを待たしたらあかん！」

虎之介「現金なんだから…まだ依頼があるかどうかも分からないのに…。」

虎吉「早よせいやぁっ！」

虎之介「はぁ…分かってるよ！」

（二人が通う高校『鳴海（ナルミ）高校』に到着）

？「…ん？あ、不破君おはよ…っ！」

虎吉「どかんかい！」

？「きゃっ！」

虎之介「おっと！」

？「あ…！」

虎之介「大丈夫？」

？「て…天童くん…！」

虎之介「怪我無い？」

？「だ、大丈夫…あ、ありがとう。」

虎之介「良かった、ごめんね。虎吉、ちょっと急いでてね。」

？「ホント信じられへんわ！」

？「『晴美（ハルミ）』。」

晴美「あのアホ！ぶつかったら謝ったらどやねんっ！」

虎之介「ホントにごめんね。」

晴美「天童くんも天童くんやで！あのアホの教育しっかりせなあかんで！」

虎之介「ごめんね。」

晴美「まったく…『雪菜(ユキナ)』大丈夫？」

雪菜「うちなら平気。天童くんが支えてくれはったし。」

晴美「とにかく、一辺ガツンと言わしたらなあかんな！虎吉ぃ！」

虎之介「はは、相変わらず元気だね『晴美』ちゃん。」

晴美「虎吉ぃっ！」

虎之介「俺達も行こう。」

雪菜「うん。」

（教室に行く）

虎之介「あ、やってるやってる。」

晴美「ちょっと聞いとんの！」

虎吉「やかましいやっちゃで…。」

晴美「虎吉ぃ！」

虎吉「痛い痛い！何すんねん！この晴れババァ！」

晴美「誰が晴れババァやっ！」

虎吉「痛いっちゅうねん！こら、虎！見てないで助けんかい！」

虎之介「無理だよ。だって完全に虎吉が悪いからね。」

虎吉「こんの裏切りもんが…っ！」

雪菜「晴美、もうええて。」

晴美「いいや、このアホはしばいたらな分からへんねん！」

虎吉「アホちゃうわアホ！」

晴美「アホはアンタやアホ！」

虎吉「うっさいわブス！」

晴美「なっ！」

虎吉「そんな性悪やからモテへんのや！このペチャブス！」

晴美「こ…っ！」

生徒1「何やペチャブスって？」

生徒2「ペチャパイのブスってことちゃうか？」

生徒1「あ、成程！上手いこと言うやないか不破！」

虎吉「せやろ？このアホを表すのに、いっちゃん合うとるあだ名やで！なっはっはっ！」

晴美「くっ…！」

虎之介「あ～あ…知～らないっと。」

晴美「このっ！」

虎吉「へ？」

晴美「一辺死ねぇっ！」

虎吉「ぶぺぇっ！」

虎之介「今日もよく吹っ飛んだねぇ。」

生徒1「…さ…さて、授業の準備せなな！」

生徒2「せ、せやせや！」

晴美「このアホッ！」

虎之介「…毎朝毎朝、飽きないね。」

虎吉「うるさいわ、ちきしょう…。」

虎之介「ところで依頼はあった？」

虎吉「…。」

虎之介「虎吉？」

虎吉「…あった。」

虎之介「あったの？」

虎吉「これや？」

虎之介「ん…これだけ？」

虎吉「せや…。」

虎之介「バスケットゴールの修理か…。」

虎吉「しかも報酬は五百円や。」

虎之介「こりゃまた安いね。」

虎吉「…あかんあかん！この依頼はパスやパス！」

虎之介「でもいいの？何でも引き受けるのが『万能屋』だよ？」

虎吉「んなもん、こっちかて仕事選ぶ権利ぐらいあるわ。」

虎之介「仕事選んでる余裕なんかある？今日の夕飯どうすんの？」

虎吉「う…。」

虎之介「大体虎吉がそうやって仕事を選ぶから、俺達苦労してんだよ？」

虎吉「オレはな！ホンマもんの仕事がしたいんや！男の中の男の仕事をっ！」

虎之介「ポリシーだけじゃ、お腹は膨れないよ？」

虎吉「だぁもうっ！せやったらどうすんねんっ！たった五百円の為にバスケゴール直す言うんかいっ！しかも三つもやで！やってられへんわ！」

虎之介「んふふ…。」

虎吉「な…何や？」

虎之介「これな～んだ？」

虎吉「ん？…ま…まさかそれはぁ！ふ、ふ、福沢さんじゃああ～りませんかぁっ！」

虎之介「ビンゴ♪」

虎吉「ど、どないしたんや虎！そないな大金！？」

虎之介「実はさっき依頼されたんだよ。」

虎吉「だ、誰にや？」

虎之介「二年B組の『大石』くんから。」

虎吉「ふぅん…で、依頼内容は？」

虎之介「探しものだって。」

虎吉「探しもの？」

虎之介「ま、詳しいことは放課後話すってさ。」

虎吉「よっしゃ！んじゃ放課後までその福沢さんで！」

虎之介「駄目だよ。」

虎吉「な、何でや！？」

虎之介「まだ依頼を完了してないのに駄目だよ。」

虎吉「アホッ！それは前払いやろ！やったらその金はもうオレらのもんやんけ！」

虎之介「…それもそうだね。」

虎吉「やろ？んじゃ行くで虎！」

虎之介「何処に？」

虎吉「決まっとるやろが！その金で……特製マグロ丼を食うっ！！」

虎之介「と、特製マグロ丼っ！！！そ……それは俺達には夢のような食事……一杯２５００円の…奇跡の丼！！！」

虎吉「せや……いつかは…そう！いつかは口に運ぶことを夢に見て…今日まで生きてきたんや！！！」

虎之介「た、確かにこんなチャンス滅多に…無い！」

虎吉「行くで虎ぁっ！」

虎之介「よっしゃあっ！」

虎吉「我々はついに辿り着く！夢のワンダーランド～！」

虎之介「楽しみだね虎吉！」

雪菜「何処行くんやろ天童くん達？」

晴美「ほっとき。」

（食堂に到着）

虎吉・虎之介「おばちゃあん！特製マグロ丼二丁！！！」

食堂のおばちゃん「…まだやってへんで。」

二人「へ…？」

（授業中）

虎吉「くそぉ…せっかくの特製マグロ丼が…。」

虎之介「大丈夫だよ虎吉。あ、焦らないで昼休みを待つんだよ。そ、そうすれば！」

虎吉「そうすれば…我々の夢は…。」

二人「ひっひっひ。」

生徒１「先生！二人が気持ち悪いです！」

先生「いつものこっちゃ、ほっとけ。」

二人「ひっひっひ。」

（昼休みを告げるベルが鳴る）

虎吉「鳴ったぁっ！行っくでぇっ！」

虎之介「おうっ！」

虎吉「退け退け退け退かんかぁいっ！！！」

（食堂に到着）

二人「もらったぁっ！！！」

食堂のおばちゃん「マグロ今日は無いんよ。」

二人「は…？」

食堂のおばちゃん「特製アボカド丼ならあるで。」

二人「そ、そんなぁ～っ！」

（放課後）

虎吉「どよ～ん…。」

？「えと…大丈夫？」

虎之介「ああ大丈夫大丈夫、依頼内容を詳しく話して『大石』くん。」

大石「わ、分かった。実は探して欲しいんはこの子やねん。」

虎之介「写真…これは…猫？」

大石「そうや、名前は『太一』や。」

虎吉「おいおい、探しものって猫かいな。んなもん待っとったらいつか帰って来るやろ？」

大石「…今までは長くても三日以内にはちゃんと帰って来とったんや。せやけど…もう一週間も帰って来ぉへんねん！」

虎之介「…。」

虎吉「アホくさ、猫はな放浪すんのが好きなんや。犬と違って家にずっといるわけじゃ…ん？どしたんや虎？」

虎之介「…虎吉、この写真見て。」

虎吉「はあ？何言ってんねん。オレはさっきからちゃんと…。」

虎之介「虎吉、しっかり見て。」

虎吉「虎……まさか！」

大石「？」

虎吉の心「こ、これは！」

虎之介「ね？」

大石「あ、あの…どないしたん？」

虎之介「いや、何でもないよ！」

大石「…それで、この依頼…。」

虎吉「あかんあかん！」

虎之介「虎吉！」

虎吉「この依頼お断りや！」

大石「そ、そんな！」

虎吉「悪いことは言わへん、この猫のことは諦めぇ。」

大石「…い…嫌やっ！」

虎吉「…何でそない必死やねん、たかが猫やろ？」

虎之介「言い過ぎだよ虎吉！」

虎吉「ふん。」

虎之介「ご、ごめんね大石くん！」

大石「…ど…どうしてもあかんのんか？」

虎吉「…。」

大石「『太一』は俺の命の恩人やねん……小さい頃俺が川で溺れた時…怪我してまで助けてくれてんっ！」

虎之介の心「そうか…多分その時に…。」

大石「せやし、もし今アイツの身に何かおうてんなら今度は俺が助けたいんやっ！」

虎之介「虎吉。」

大石「頼むわ！力貸してえや！！！」

虎吉「……後二万。」

大石「え？」

虎吉「後二万出す言うなら考えてやってもええで？」

大石「出すっ！『太一』を見つけてくれたら俺の全財産やるっ！」

虎吉「全財産ねぇ…男に二言はあらへんか？」

大石「もちろんや！」

虎吉「…しゃあないな…虎。」

虎之介「うん。じゃあ大石くん、この依頼、俺達『万能屋・トラ×トラ』が受けおったよ！」

大石「あ、ありがとう！」

虎吉「すぐ届けたるから、鰹節でも用意して待っとけや。」

大石「よ、よろしく頼むで！そ、それじゃ待っとるわ！」

虎之介「……虎吉。」

虎吉「ああ…厄介やな。」

虎之介「久しぶりに裏業だね。」

虎吉「んじゃさっそく行くで。」

虎之介「うん。」

（川に行く）

虎吉「ここやな、大石が溺れたんは…どや？」

虎之介「……やっぱりアレの仕業だね。」

虎吉「みたいやな…まあ、あの写真に写っとったしなぁ…『霊斑（レイハン）』が。」

虎之介「大石くんを溺れさせたのは…。」

虎吉「『邪霊（ジャレイ）』の仕業やな。多分大石を殺ろうとしたんやろうが、猫に邪魔された。」

虎之介「『太一』は怪我してたって言ってたよね？恐らくその傷から…。」

虎吉「『侵蝕（シンショク）』しよったな。」

虎之介「長年かけて、『太一』の体をのっとった。」

虎吉「大石の側を離れたのは、猫の最後の抵抗ってわけやな。」

虎之介「元々その霊が狙ってるのは大石くんみたいだしね。」

虎吉「せやけどこんままやったら、『完全侵蝕』されて『邪体(ジャタイ)』になるで。」

虎之介「そうなったら大石くんだけじゃなく、他の人も襲う。早く何とかしなくちゃ。」

虎吉「……で、分かったか？」

虎之介「待って……見つけた！微かだけどまだ『霊糸(レイシ)』が残ってる。ということは…。」

虎吉「近くにいるってわけやな！よっしゃ！早ぅ辿るで！」

虎之介「うん！」

虎吉「『万能屋・トラ×トラ』、ミッションスタートや！」

次回に続く

第二劇『ミッションスタート』

虎吉「行くで虎！ミッションスタートや！」

虎之介「よし！」

（その頃大石は）

大石「『太一』…今頃腹空かしとるかも……アイツらは待っとけて言うとったけど……『太一』…。」

（虎吉達は）

虎吉「この感じ…おるな…近くに。」

虎之介「『霊糸』が太くなってる！あのマンションだっ！」

女「きゃぁぁぁっ！！！」

二人「！」

虎之介「虎吉！」

虎吉「急ぐで！」

（マンションに行く）

女「た、助けてぇっ！」

？「シャァッ！」

虎吉「そこまでや！」

？「ギ！」

虎之介「大丈夫ですか？」

女「は、はい…！」

虎之介「ここは危険ですから離れてて下さい。」

女「わ、分かりました！」

虎之介「…虎吉。」

虎吉「ああ。」

？「シャァッ！」

虎吉「『完全侵蝕』されとる。」

虎之介「『太一』！目を覚ますんだっ！」

太一「ギ？」

虎之介「大石くんが…学くんが君の帰りを待ってるんだよ！」

太一「…ま…な…ぶ…？」

虎之介「そうだよ！学くんだよ！」

太一「ギ…シャァッ！」

虎之介「！」

虎吉「おらっ！」

太一「ギッ！？」

虎之介「…太一…。」

虎吉「無駄や。今のアイツは正気やない。今は『邪霊』に侵された『邪体』や！」

虎之介「くっ！」

虎吉「おらぁっ！クソ猫っ！こっちや、ついてきぃっ！」

虎之介「虎吉！」

虎吉「河原に行くで！」

虎之介「わ、分かった！」

（河原に到着）

虎吉「ここやったら思う存分やれるで！」

虎之介「あまり傷つけたくなかったけど…。」

虎吉「しゃあないやろ！『邪体』から救うんは、『侵蝕』した『邪霊』より強い力ぶつけて体から追い出すしかあらへん！」

太一「ギギ…！」

虎之介「く…霊は霊らしくさっさと成仏してくれればいいのに！」

虎吉「全くや！行くで！」

？「あ、あれは！」

虎吉「たあっ！」

太一「ニャンッ！」

？「太一っ！！」

虎吉「へ、どやら『侵蝕』しとんのは『低級霊』みたいやな！」

虎之介「そうだね、多分後一発で…。」

？「止めろぉっ！！！」

二人「！」

虎之介「お、『大石』くん！」

大石「お前ら一体何しとんねんっ！」

虎吉「ち、待っとけ言うたのに！」

大石「何でこんな…何で太一を殴んねんっ！」

虎之介「違うんだ大石くんっ！」

大石「何が違うねん！太一が何した言うねん！」

虎之介「太一を助けるためなんだよ！」

大石「助ける？嘘や！助けるなら何で殴る必要があんねんっ！見てみぃ、太一はあんなに痛がっとるやないか！」

太一「ギッ！」

大石「もう大丈夫や……早ぅ帰ろう。」

太一「シャァッ！」

虎吉「ちぃっ！」

太一「ニャンッ！」

大石「太一っ！な、何すんねんっ！」

虎吉「アホか、よう見てみぃ！あれが猫言う面か？」

太一「ギァっ！」

大石「た…太一…！」

虎吉「お前の猫は、さっきみたいにお前を襲うんか？」

大石「襲う…？」

虎之介「信じられないかもしれないけど、今の太一は、大石くんが大好きな太一じゃないんだ。」

大石「ど、どういうことや？」

虎之介「太一はね、今『邪霊』に侵されてるんだ。」

大石「じゃれい？」

虎吉「ま、悪霊や悪霊。」

大石「う、嘘や！そないなもんおるわけないやろっ！からかってんやろっ！ふざけんなっ！」

虎吉「せやったら、今のアイツの顔、どう説明すんねや？」

大石「あ…！」

虎吉「あの顔は猫のもんやない…いや、この世の生き物の顔やない。」

大石「太一……ホンマに霊に…！」

虎之介「大石くん、小さい頃、この川で溺れたって言ったよね？」

大石「あ、ああ。」

虎之介「大石くんはね、溺れたんじゃない。あの悪霊に溺れさせられたんだ。」

大石「え…？」

虎之介「だけど、太一はそれに気付いて大石くんを悪霊から助けたんだ。怪我してまでね。」

大石「…。」

虎之介「そしてその時、怪我した太一の傷から『侵蝕』したんだ。」

大石「じ、じゃあ…！」

虎之介「そして長年かけて、太一の体を弱らせ乗っとったんだ。」

大石「じゃあ太一は俺のせいで？」

虎之介「違うよ。太一は大好きな主人を守っただけだよ。文字通り命を懸けてね。」

虎吉「ま、相当苦しかったやろうな。必死で今まで『邪霊』の意識に抵抗してきたんやからな。時には激痛が走ることもあったやろな。」

大石「くっ…太一…ごめん…太一！」

虎之介「大丈夫だよ大石くん。ああいう奴らを倒す為に俺達がいるんだ。」

大石「え？」

虎吉「オレらが元に戻したる言うてんねん。お前の大好きな猫にな。」

大石「そ…そないなこと…出来るんか？」

虎之介「出来なかったら引き受けないよ！俺達はどんな仕事も必ず完了させるから！」

大石「お、お前ら…。」

虎吉「分かったんならおとなしゅうしとるんや。」

虎之介「太一の中にいる『邪霊』は俺達が倒す！」

大石「お前らは一体…。」

二人「『万能屋・トラ×トラ』、よろしく！」

太一「シャァッ！」

虎之介「太一！今すぐ元に戻してあげるからね！」

虎吉「虎！猫を引きつけとけやっ！」

虎之介「分かった！」

大石「太一！」

虎吉「さあ、そろそろおとなしゅうしてもらうで。」

大石「な、何しとん？」

虎吉「ええか、『侵蝕』から救うんは、こうやって強力な霊波を！」

虎之介「今だ虎吉っ！」

虎吉「ぶつけりゃええんやぁっ！！！」

太一「ニャァッッッ！」

大石「太一ぃっ！！！」

太一「…ギィ…。」

大石「た、太一！」

虎吉「近づくんやないっ！」

大石「え！？」

虎吉「こっからが本番や！」

虎之介「下がってて大石くん！」

太一「…！」

大石「あっ！太一から何か出てきよる！」

太一「…ま…な…ぶ…！」

大石「太一ぃっ！」

太一「ニャァァァッ！！！」

虎吉「出てきよったな。」

大石「な、何やあれっ！？」

虎吉「あれが猫に取り憑いた『邪霊』の正体や！」

大石「あ、あれが太一の中に…た、太一は！太一ぃっ！」

虎之介「大丈夫、太一は無事だよ！衰弱してるけど命に別状は無いよ。」

大石「良かった…太一……良かったぁ。」

虎之介「良かった…さて、後始末しなきゃね。」

虎吉「せやな。」

邪霊「ジャマスルナッ！」

虎吉「お～お～、随分肥えよって。」

虎之介「伊達に何年も太一の生気を吸ってないってわけだね。」

邪霊「ユルサナイゾ！セッカクノエモノヲ！」

虎吉「アホ抜かせ！さっさと成仏せぇや！」

虎之介「そうだ、この世ではお前達は存在しちゃいけないんだ！」

邪霊「コ、コロシテヤルッ！」

虎吉「うっさいわアホ！」

邪霊「グ…シ…シネェェェッ！」

虎吉「虎、コイツはオレが逝かすわ。」

虎之介「はいはい。」

邪霊「！……ド…ドコイッタ？」

虎吉「ここや。」

邪霊「イ、イツノマニッ！」

虎吉「これで終まいやぁっ！」

邪霊「ギャァァァッ！」

虎吉「消えろやぁっ！！！」

邪霊「セ…セッカク…ココマデ…テニイレタノニ…！」

虎吉「そら残念やったな。来世に期待するんやな。」

邪霊「グオォォォッ！」

虎之介「ナイス虎吉！」

虎吉「楽勝や楽勝！」

大石「お、終わったんか？」

虎吉「おぅ終わったで。」

大石「……あの…。」

虎吉「礼なんかええよ、オレらは金で動いてんねん。ギブアンドテイクや。」

大石「…ホンマ…ホンマありがとう…。」

虎之介「えへへ…虎吉。」

虎吉「ああ、ミッションコンプリートや！」

（翌日）

虎之介「ん？あ、大石くん！」

大石「やぁ。」

虎之介「どうしたの？」

大石「これ。」

虎吉「待ってましたっ！」

虎之介「ちょっと虎吉！」

虎吉「おおっ！１５万もあるで！」

虎之介「１５万っ！？ちょっ…これ多過ぎだよ！」

大石「ううん、これでも少ないくらいやし。俺の全財産や、受け取って欲しい。」

虎吉「うほぅっ！これで当分は食いっぱぐれないで！わっはっは！」

虎之介「…もう！」

虎吉「あ、何すんねん！」

虎之介「二万で良かったんじゃなかったっけ？前払いも一万貰ったし。」

虎吉「う…いや…でもくれるって言うんやから…。」

大石「不破の言うとおりや。君らには感謝してもしきれへんし。」

虎之介「ううん、これは返す。成功報酬として二万だけ貰うよ。」

虎吉「ちぇ。」

大石「え…でも。」

虎之介「ううん、俺達はプロだよ。お金に見合った仕事をするだけ。」

大石「天童…。」

虎之介「そのお金で、太一に何か買ってあげて。」

大石「…分かった。」

虎之介「よし！」

大石「ありがとうな…ホンマありがとうな。」

虎吉「へ…。」

虎之介「また何か依頼あったら言ってね。」

大石「ホンマにありがとうな！」

（大石は出ていく）

虎吉「二万か……ま、ええか。」

虎之介「だね。」

晴美「気持ち悪いなぁ、二人してニヤニヤして。」

虎之介「晴美ちゃん。」

虎吉「また出た。」

晴美「何がまた出たや！」

虎吉「何か用なんか？」

晴美「虎之介、今の誰？」

虎吉「無視かい。」

虎之介「依頼人だよ。昨日成功したから、お礼を貰ったんだよ。」

晴美「へぇ、アンタ達でも成功すんねや。」

虎吉「何やとっ！もっぺん言ってみぃ！このペチャブス！」

晴美「ペチャブス言うなっ！」

虎吉「がぽぅっ！」

虎之介「あらら…。」

晴美「もうっ！アンタ達なんか、一生『あの人』には勝てへんわっ！このアホッ！」

虎之介「…大丈夫、虎吉？」

虎吉「あ…相変わらずの馬鹿力や…。」

虎之介「んふふ。」

虎吉「ん？どないした？」

虎之介「今日の昼休み。」

虎吉「昼休み？……ああっ！特製マグロ丼っ！」

虎之介「お金はたんまりある。お代わりも出来るよ！」

虎吉「うっひょおっ！」

（昼休みを告げるベルが鳴る）

虎吉「鳴ったぁっ！行っくでぇっ！」

虎之介「おう！」

（食堂に到着）

二人「おばちゃあ～んっ！」

管理人「あ、食堂のおばちゃんやったら風邪引いて休みやで。」

二人「ノォォォーーーーーッ！！！」

（教室に戻る）

虎吉「くそぅ…。」

虎之介「あはは……はぁ。」

虎吉「ていうか、あのおばちゃんしか特製マグロ丼作れへんて、どんな食堂やねん！」

虎之介「いつになったら食べられるのかな…。」

虎吉「…ま、ええか。手元には前払い合わせて三万あるし…今日はちょっと豪勢な…。」

？「まいどあり♪」

虎吉「あっ！」

？「アンタ達がこんな大金持ってるなんて不思議ぃ～！」

虎之介「『ナギサ』さん！」

虎吉「こら返せやっ！」

ナギサ「ダ～メ。」

虎吉「ふざけんな！お前一体！」

ナギサ「集金よ集金。」

虎吉「な、何のことや？」

ナギサ「とぼけないの！『シーマ』さんにまだ払ってないでしょ？
や・ち・ん♪」

二人「あ…！」

ナギサ「んじゃそゆことで♪」

虎之介「わ…忘れてた…。」

虎吉「あんのババァ…ッ！」

虎之介「どうしよ…残り４５６円…。」

虎吉「う…嘘や……嘘やぁっ！」

虎之介「どうすんのさ虎吉！」

虎吉「こ、こうなったら銀行でも襲って…！」

ナギサ「あ、そうそう！今日用事があるから店に来るようにってことよ♪」

虎吉「は？」

ナギサ「依頼かもよ？じゃあね、お二人さん♪」

虎之介「……どうする？」

虎吉「あのババァのこっちゃ、また厄介な仕事やぞ。」

虎之介「とにかく行くしかないね。断ったら断ったで…。」

虎吉「半殺しや……しゃあない、行くで。」

次回に続く

第三劇『狂人ウイルスを追え』

虎之介「一体何のようだろうね、シーマさん。」

虎吉「どうせろくなもんやないで。この前なんて墓場に埋められとる書類を取ってくるってやつやったやんけ！」

虎之介「あ、あれはキツかったね。しかも土葬されたいろんな死体の腐臭が……ああ…思い出しただけで気分が…。」

虎吉「ホンマ嫌やわぁ…ナギサまで絡むとなると……ただの仕事やないで…。」

虎之介「はは…ま、行けば分かるね。…あ、着いた。」

虎吉「ホンマ何べん来ても変な名前や。いくら裏町で目立たへんからてこの名前はないやろ…。」

虎之介「…『わんぱく堂』…何かおもちゃ屋みたいな名前だよね。」

虎吉「おもちゃか…ま、あながち間違っとるわけでもないけどな。その世界の連中にとっちゃたまらんおもちゃ屋や。」

虎之介「だね。」

虎吉「ちぃーす。」

ナギサ「あ、来た来た！」

虎吉「あ？ババァは？居ぃひんのかい！」

ナギサ「いやそこに…。」

虎吉「まぁーったく！何やねん！人を呼びつけといて居ぃひんのかいっ！しばいたろかあのクソババァ！」

虎之介「ん？あ、虎吉！」

虎吉「信じられへんわ！店はボッタクリ店やわ、ろくな客しか居ぃひんわ。」

ナギサ「ちょっとそれアタシじゃないわよね！」

虎吉「そん通りやボケ！へっ、当の店主はワガママで勝手で、年齢詐欺のクソババァ！あ～嫌や嫌や。」

虎之介「ち、ちょっと虎吉ってば！」

虎吉「さっきから何や…ね…ん…！」

？「楽しいこと言ってくれるじゃない！もう一回聞きたいなぁ…なぁんて言ったのかな？」

虎吉「え…いや…その…。」

？「大丈夫大丈夫♪怒らないから言ってごらんなさい？」

虎吉「……ババァ。（ボソ）」

？「ん～イケない子ね♪」

虎吉「がっ！か…肩が…！」

？「ダメよ、目上の者には敬語を使いなさい。」

虎吉「う…うっさいわボケ！」

？「ん～えい！」

虎吉「こ…腰がはぁ…！」

虎之介「出た……か…関節外し…！」

虎吉「ぐ…ぎぎ…。」

ナギサ「懲りないわね虎吉。」

虎吉「ち…ちきしょう…。」

ナギサ「さて『シーマ』さん、そろそろ。」

シーマ「そうねぇ…反省しましたかぁ？」

虎吉「…さ…さっさと治さんかいこのクソババァッ！」

シーマ「……うりゃ！」

虎吉「ぬおっ！」

シーマ「反省が足りません！」

虎吉「う…うう…っ！」

虎之介「ど、どうしたの？」

虎吉「は…腹が…っ！な…何…しよった…っ！」

シーマ「ツ・ボ♪」

虎之介「ツボ？」

シーマ「そうよ♪ツボを押したの♪」

虎吉「な…何の…ツボや……は…らが…っ！」

シーマ「ん～何だと思う？」

虎吉「し…知ら…へんわ…っ！」

シーマ「答えはぁ……猛烈にウ〇コがしたくなるツ・ボよ♪」

皆「！」

虎吉「な…何やとぉ…っ！」

ナギサ「そ、それはシーマさん…。」

シーマ「だってこぉんなビューティフルなレディに向かってババァなんていうんだもん！」

虎吉「ぐ…あ…い…っ！」

虎之介「あ、謝りなよ虎吉！」

虎吉「だ…誰が…っ！」

シーマ「ん～このままだともらしちゃうわねぇ♪」

虎吉「！」

ナギサ「アンタ最悪だわよ、もらしたら。」

シーマ「あ、そ～だ写真写真♪この決定的瞬間を収めなきゃね♪」

虎吉「こ…のババァ…！」

虎之介「虎吉、早く謝りなよ！このままじゃ本当にもらしちゃうよ！」

虎吉「ぐぞぉ…ト…トイレ…っ！」

シーマ「無理無理♪関節外してるのよ♪動けない動けない♪」

虎吉「も…もれる…っ！」

シーマ「ふふん♪さあ、劇的ショットよ♪」

ナギサ「ちょっとマジ！」

虎之介「虎吉！」

虎吉「ぬおぉぉぉーーーーーーっ！！！……ごめんなさい。」

シーマ「…えへ♪よろしい♪」

虎吉の心「い…いつか泣かしちゃる…！」

ナギサ「でもシーマさん、本当にもらしたらどうするつもりだったんですか？ここ、店の中なのに。」

シーマ「ん～考えてなかったわ♪」

ナギサ「はい？」

シーマ「ま、この子の性格上こうすると素直になるのよ♪」

ナギサ「は…はぁ…。」

虎之介「あんなことされたら誰でも素直になると思うけど…。（ボソ）」

シーマ「あら？何か言った虎ちゃん？」

虎之介「い、いえ何も無いです！」

シーマ「よろしい♪」

虎吉「ふぅ…治まってきよった。おいバ…ッ！」

シーマ「何かな？」

虎吉「ぐ……一体何の用なんや？」

シーマ「あ、そうそう、ウ〇コ騒ぎでスッカリ忘れてたわ♪」

虎吉「ああもうっ！早ぉ言えやっ！」

シーマ「んもう、相変わらず口が悪いわね。…えと……コレよ。」

虎吉「あ？」

虎之介「ガラスの箱？コレは…カプセル？」

ナギサ「何のカプセルなんですか？」

シーマ「…このカプセルは『アヴィス』と言われているものなの。」

ナギサ「『アヴィス』ッ！？」

虎之介「知ってるんですか？」

ナギサ「え…ええ…。」

虎吉「…それにしても厳重な箱に入ってんねんな。これ強化ガラスやろ、出して手に取ったらアカンのんか？」

シーマ「手にしても構わないけど、もし中身が付着したら大変なことになるわよ？」

虎吉「何やねん大変ことて？」

ナギサ「『狂人ウイルス（バーサーカー）』…。」

シーマ「あら、さすが情報屋のナギサちゃん！よくご存じ♪」

虎吉「聞いたこと無いで？何やねんそれ？」

ナギサ「…ちょっとテレビつけていいですか？」

シーマ「ど～ぞ♪」

虎吉「お、おいこら待てや！何やねん急に！」

ナギサ「いいから見なさい。」

虎吉「ん？何やニュースやんか。」

ニュース「またも犠牲者が出ました。近頃若者が急に錯乱し暴れ出すという…。」

虎之介「このニュース知ってるよ。最近若い人が急に暴れ出して他人を傷付けたり殺したりしてるんだよね。」

虎吉「おいまさか…！」

ナギサ「そう、これは『狂人ウイルス・アヴィス』のせいよ。」

虎之介「でもこれ関東の事件だよね？まさか関西にも？」

ナギサ「シーマさん…。」

シーマ「ある暴力団の一味にこの『アヴィス』が流れたの。」

ナギサ「それはアタシも知ってます。その暴力団の頭は有名人ですから。」

虎吉「有名？誰や？」

ナギサ「『鎌田浩一』よ。」

虎之介「ホントに！！」

虎吉「…誰や？」

皆「…。」

ナギサ「アンタ…マジに言ってんの？」

虎吉「あ？何やねん、知らんとアカンのか？」

シーマ「この子は…。」

虎之介「まあ、虎吉はニュースなんて見ないしね。」

虎吉「だから何やねんさっきから！」

ナギサ「政治家よ。」

虎吉「政治家？」

ナギサ「それも掛け値無しに大物中の大物のね。」

虎吉「ふぅん、そない偉いオッサンなんか。」

虎之介「うん。次期総理にも名が挙がってるくらいだしね。」

虎吉「へぇ…。」

ナギサ「『鎌田』は表向きは本当に正しい政治家よ。世界の貧しい国を周って寄付金を納めたり、全国の幼稚園等に足を運んでは子供達に紙芝居など、子供達を楽しませることを中心に活動してるわ。」

虎吉「成程…んで？」

ナギサ「だけど裏ではヤクザや暴力団と通じ、麻薬の密売や人売り、はたまた暗殺までしているらしいわ。」

虎之介「そんなの許せない！」

虎吉「こらオモロイな！表は誰もが尊敬する人格者、せやけど裏では…薄汚ぇクソ野郎ってわけや。」

ナギサ「シーマさん、仕事というのは？」

シーマ「ええ。この『狂人ウイルス』の根元を断つことよ。」

虎之介「根元？『鎌田』が黒幕じゃないんですか？」

シーマ「『鎌田』が実質売りさばいているのは間違いないと思うわ。

ただ…。」

虎之介「ただ？」

シーマ「この事件はほんの始まりのような気がするのよ。『鎌田』でさえも、誰かの操り人形に過ぎないような…。」

虎吉「…そいつはテメエの勘か？」

シーマ「まあね。」

虎之介「思ったよりしんどい仕事になるね。」

シーマ「それじゃ詳しい話を。」

虎吉「ちょい待てや。」

虎之介「…虎吉？」

シーマ「何？」

虎吉「オレはまだ引き受けるなんて言うてへんで？」

虎之介「え？」

シーマ「…受けないの？」

虎吉「虎の言うたとおり、この仕事はトップクラスに厄介な感じがしよる。」

シーマ「…それで？」

虎吉「オレらも慈善でやってるわけやない。これだけの仕事や、キッチリ満たすもんが欲しいんや。」

ナギサ「アンタ…。」

シーマ「はぁ…いくら欲しいの？」

虎吉「にひ♪さすがシーマ、話が早いわ！せやな、前金で百万、仕事が終わり次第もう百万てとこやな。」

虎之介「に、二百万っ！！！」

虎吉「どや？払うんか？」

ナギサ「シーマさん…。」

シーマ「いいわ、仕事が無事終わったら三百万渡すわ！」

虎之介「よ…四百万…！」

虎吉「……にひ♪うっしゃ、その仕事貰いや！」

虎之介「そ、そんな大金いいんですか！」

虎吉「構へん構へん、どうせ依頼人から相当がめとるはずやからな！」

シーマ「あ、相変わらずお金のことになると鋭いわね。」

ナギサ「それじゃシーマさん、これからのことを。」

シーマ「そうね。」

ナギサ「根元を断つといっても先ずは『鎌田』を押さえなきゃ話にならないわ。」

シーマ「そう、それで『鎌田』の居所なんだけど、今京都に来てるらしいのよ。」

虎吉「こら案外早ぅ終わるかもな。」

シーマ「そう簡単にはいかないわよ。」

虎吉「何でや？」

シーマ「『鎌田』の周囲には常にＳＰがついてるのよ。それに噂では凄腕のスナイパーまで雇ったらしいのよ。」

虎吉「そらまた難儀やな。」

虎之介「『鎌田』が一人になる時間は無いんですか？」

シーマ「そこまでは…。」

虎吉「何や頼りないで！」

シーマ「そう言わないの。だからこそナギサちゃんを呼んだんだからね♪」

ナギサ「分かりました。アタシの情報網を使って『鎌田』のプライベートを全て暴きます。」

シーマ「ん～さすがはナギサちゃん♪頼むわね！」

ナギサ「はい！」

虎吉「ほんじゃそれまでオレらは下手に『鎌田』に近付かへん方がええな。」

虎之介「そうだね、下手に警戒されたら接触が困難になる。」

虎吉「しゃあけど、何もせずにおるのは退屈やし……オレらはオレらで網張るか？」

虎之介「うん、それじゃ俺達は『鎌田』が頭やってるっていう暴力団を追ってみようか。」

虎吉「ナギサ、お前のことや、その暴力団について何か知ってんねんやろ？教えろや。」

ナギサ「いいけどキチンと情報料は頂くわよ♪」

虎吉「なっ！金取るんかい！」

ナギサ「もちろんよ♪」

虎吉「な、なんぼや？」

ナギサ「そうねぇ…これくらいかな？」

虎吉「…ふ、取っとけや。」

ナギサ「千円…？」

虎吉「きっちしやろ？」

ナギサ「何ボケてんの？ケタが二つ違うわよ！」

虎吉「はあ？だってお前指一本立てたやんけ！」

ナギサ「だから一本は一本でも１０万よ♪」

虎吉「あ、あほかっ！どんだけ取んねん！せめて一万やろ！」

ナギサ「あら、嫌ならいいわよ？自分達で探すのね。この日本中を。」

虎吉「ぐ……か…貸しとけや。」

ナギサ「まいどあり♪」

虎吉の心「い…いつかヒィヒィ言わしたる！」

ナギサ「ん？」

虎吉「何でもあらへん！さっさと情報寄こせや！」

ナギサ「はい、この紙に書いてあるわ。」

虎之介「分かりました。」

シーマ「気を付けなさいね。油断してるとあなた達でも死ぬわよ♪」

虎吉「ニコニコして言うな！」

ナギサ「それじゃ『鎌田』のことが分かったらメールするわね。」

虎吉「了解や。」

シーマ「皆気を付けてね。ナギサちゃんも。」

ナギサ「はい！」

虎之介「虎吉！」

虎吉「うっしゃ！ミッションスタートや！」

次回に続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7436d/

『トラ×トラ』

2010年10月20日18時55分発行